

心不相応行の大乗アビダルマ的分析

吉 元 信 行

一 アビダルマにおける心不相応行論

北伝のアビダルマにおいては、存在を分析するにあたって、色・心・心所・心不相応行・無為という五位の分類の方法論を用いたことは周知の如くである。その中でも、特に心と相伴う関係にあるものではなく、また物質的なものでも心理的なものでもないが、それらの間にはたらく関係とか力、または概念というような特殊な法を「心不相応行法」として立て、それらは実有であると説いた説一切有部の存在論は、殊に難解であるとされる。しかし、この心不相応行を実有としたところに説一切有部の面目があり、そのことが、経部を始め瑜伽唯識学派等の教学形成に大きな影響を与えたのも事実である。

この心不相応行なる概念は、原始經典の中に認められないことから、この概念を立てない学派やこれを実有としない学派からの格好の論難の材料ともなってきた。ところが、そのような論争を通じて、説一切有部では、いよいよそれについての分析と研究を進め、また、その対立学派は、その教学を批判的に摂取して、さらに自らの教学を深めていくことになった。

元来、原始仏教においては、あらゆる存在の分析は、五蘊・十二処・十八界という三科の分類によってなされ、そこには、心所（心相應行）や心不相応行なる概念はまったく見られない。これは、原始仏教における一切法の分類が、専ら存在の現象面の分析にとどまったためである。ところが、仏滅後になって、アビダルマ的研究法がとられるよう

になり、そこでは、經典に説かれる教義を説明定義せんがために、諸門分別という研究の方法論がとられた。そして、相対的現象だけでなく絶体的な法をもふくめた有為法・無為法としてとらえるようになり、さらに、存在を現象面だけでなく、存在を存在たらしめるものの追究という形で分析をする必要が生じてきた。このようにして、一切法を蘊・処・界という観点から分析する方法と、有為法・無為法とする考え方を融合させて、ここに、色・心・心所・心不相応行・無為という五位の分類が成立したと考えられる。^①

この中で、心不相応行なる分類は、原始仏教や南伝アビダルマではまったく認められないものであり、さらに、これらの諸法を実有であると考える説一切有部の存在論は特異なものであると言えよう。しかし、この心不相応なる概念の萌芽は原始仏教において認められないことはない。それは、原始仏教の時代に、五蘊等の存在の現象的把握のほかに、有情の存在を形成せしめる支配力とも見らるべき根の思想のあったことである。

この根の思想は、仏教以前のインドの諸思想に存在し、それは、根本原因 (prakṛti) より派生した力を意味するものであった。仏教では、この思想を批判的にとり入れて、無我縁起という立場で、有情の自主的積極的身心の活動力

として二十二根を立てることになった。

これら二十二根を分類的に考察する段階で、その中でも、物質的なものでも心理的なものでもない命根の存在の影響をうけて同様の性格をもった心不相応行なる諸概念が抽出されるようになったと考えられる。^②

『順正理論』によると、二十二根は、一切法の中でも作用が極めて勝れて自在であるという。諸法を見ると、皆それぞれ個々に増上なる作用をもっているから根ということもできるが、有情の中で極めて増上なる作用をもつ二十二だけを抽出して根と呼んだとされる。アビダルマでは、諸法を現象面だけではなく、その根底にある作用という点からも分析していった。そういう根的な諸法の追究というところに五位の分類が成立したのであろう。そのことは、五位七十五法の分類的考察が、『俱舍論』等のアビダルマ論書における「根品 (Indriya-nindosa)」において論述されていることから判明するであらう。

これら二十二根の中で、命根が心不相応とされるようになったのは、仏陀入滅前における命行 (jivita-saṅkhara) 留捨の問題が発端になったと考えられる。命行とは、寿命を維持するための潜在的はたらきのことである。『マハーパリニッパーナスutta』では仏陀の言葉として、次の様

な一文がある。

さあ、私はこの病いを氣力で堪えて、命行を留めて (adhiṭṭhāra) 住しよう (D. II.p. 99)。

このあと、仏陀は、魔波旬の勧めによって、寿行 (vipassāna) を捨てることになる。しかし、仏陀の前世の業によって、命行はその後クシナガラで入滅されるまでの三ヶ月間は続くわけである。④ ここにおける命行は、仏陀の意志によって寿行を捨てた後も、続くわけであるから、心不相応ということになる。この問題を発端として、後のアビダルマにおいて、留多寿行・捨多寿行の論議が交されることは周知の如くである。

このような考え方にもとづいて、アビダルマの時代になると、命根以外にも、心不相応なる諸法が分析されるようになる。この心不相応行に相当する概念の認められる最初の論書である『舍利弗阿毘曇論』では、命根 (命結) 以外に、命根に関連すると思われる「生・老・死」をあげ、さらに、高度の禪定の段階として、身心のコントロールを超えた「無想定・得果・滅尽定」を加えるようになる。その後、正統バラモンや外教における存在の分析を採用して、得・非得、衆同分、さらには、名・句・文・同・異・和合等の諸概念がとり入れられ、⑤ それらを仏教諸学派が自らの

存在論に応じて、取捨選択及び付加をなして、今日の資料に見られる心不相応行の諸形態が成立したと考えられる。

そこで、本論において問題にしようとする、大乘の瑜伽唯識の思想をアビダルマ的法相でまとめる無著の『阿毘達磨集論』(『集論』) を基にして、その他主要な論書における心不相応行の分類を大まかに図示すれば、おおよそ次頁の表の如くなるであろう。⑥

ここで、(1) 得・(14) 異生性までは、『集論』では、おおむね、説一切有部の論書の伝統を受け継いでおり、(15) 流転以降の項目が新たに付加されていることがわかる。このことは、『瑜伽論』とも、(24) 不和合を除いてほぼ一致することから、瑜伽唯識学派における心不相応行論の特色であると思われる。

そこで、『集論』における心不相応行各法の順序及びその定義を見ると、内容的にもかなり合理的・体系的に配列されていることがわかる。すなわち、有情が非心理的に善・不善法を増減する状態として(1) 得がある。また、有情が高度の禪定に入るとき、心・心所のはたらきをおさえる非心理的はたらきがある。その禪定の段階に応じて(2) 無想定・(3) 滅尽定・(4) 無想果がある。有情の生命は心理的にコントロールできないものである。その有情の人格を一定期間

Abhidharmasamuccaya (AS)		瑜伽論 卷三 大・30・293 c		瑜伽論 卷五二 大・30・586 c ~ 588 c		成実論 大32・289 a		俱舍論 大29・22 a ~ 29 c AK. pp. 62-82		法蘊足論 大26・692 c		舍利弗 阿毘曇論 大28・545 b	
集論 (AS _{ca})		(1) 得		(5) 得獲成就		(1) 得		(1) 得 prāpti		(8)(1) 事得 (9)(7) 依得			
(1) prāpti	得	(1) 得		(5) 得獲成就		(1) 得		(1) 得 prāpti		(8)(1) 事得 (9)(7) 依得			
(2) asaṃjñi- samāpatīti	無想定	(2) 無想定				(3) 無想定		(5) 無想定 asaṃjñi- samāpatīti		(2) 無想定		(5) 無想定	
(3) nirodha- samāpatīti	減尽定	(3) 減尽定				(4) 減尽定		(6) 減尽定 nirodha- samāpatīti		(3) 減定		(7) 減尽定	
(4) āsaṃjñika	無想果	(4) 無想異熟				(5) 無相処		(4) 無想果 āsaṃjñika		(4) 無想事		(6) 得果	
(5) jiviteṇḍriya	命根	(5) 命根		(6) 命根		(6) 命根		(7) 命根 jivita		(5) 命根		(4) 命結	
(6) nīkāya- sabhāga	衆同分	(6) 衆同分		(7) 衆同分				(3) 衆同分 sabhāgata		(6) 衆同分			
(7) jāti	生	(8) 生		(1) 生		(7) 生		(8) 生 jāti		(10) 生		(1) 生	
(8) jarā	老	(9) 老		(2) 老		(10) 老		(10) 異 jarā		(11) 老		(2) 老	
(9) sthiti	住	(10) 住		(3) 住		(9) 住異		(9) 住 sthiti		(12) 住			
(10) anityatā	無常	(11) 無常		(4) 無常		(8) 減 (11) 死		(11) 減 anityatā		(13) 無常		(3) 死	
(11) nāmakāya	名身	(12) 名身		(8) 名身		(12) 名衆		(12) 名身 nāmakāya		(14) 名身			
(12) padakāya	句身	(13) 句身		(9) 句身		(13) 句衆		(13) 句身 padakāya		(15) 句身			
(13) vyāṇjanakāya	文身	(14) 文身		(14) 文身		(14) 字衆		(14) 文身 vyāṇjanakāya		(16) 文身			

維持させるのが(5)命根である。有情には、身形・感官の機能・飲食等でその意志に関りなく様々な相似性がある。その相似性たらしめるはたらきを(6)衆同分という。有情には、その心に関りなく、生れ、老い、存続し、病壊するはたらきがある。そのような変化を(7)生・(8)老・(9)住・(10)無常という。一方、有情は、思惟・表現・伝達的手段として、言語表現をもっている。この言語表現は、一たん発せられ

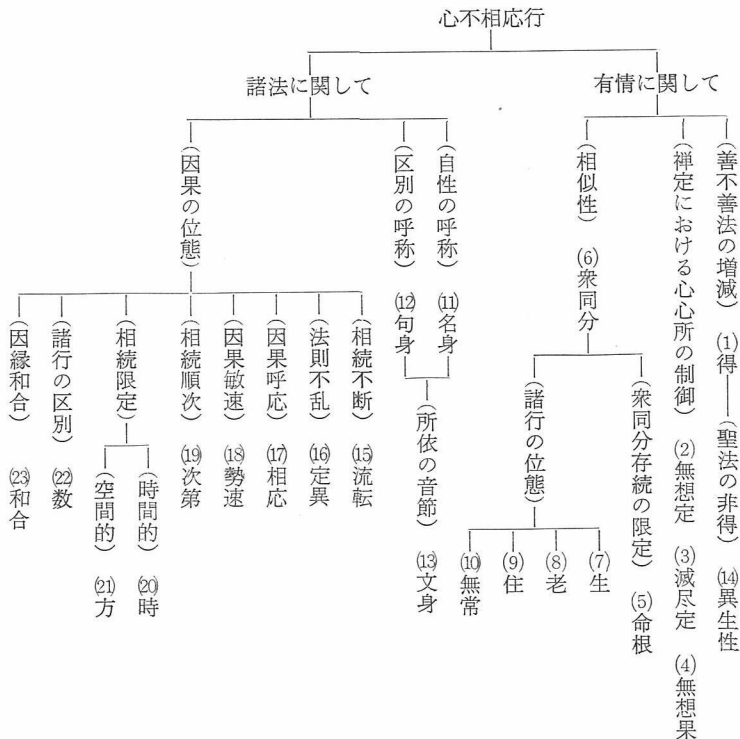
れば、心に係りなくある特定の意味をもつ。その中であるものの本質的な呼称が(11)名身であり、それが集まって一定の意味をもつのが(12)句身、それらを構成する音節又は文字を(13)文身という。有情が聖法を得ていない状態を(14)異生性という。

このあと、『集論』では、説一切有部では立てない多くの心不相応行をあげる。それらはすべて、諸法の因果相続

(14) pithagjana- va	異生性	(7) 異生性	(14) 異生性	(2)(13) 凡夫法 不得	(2) 非得 aprāpti		
(15) pravṛtti	流転	(15) 流転	(13) 流転				
(16) pratītyasamut- pāda	定異	(16) 定異	(14) 定異				
(17) yoga	相応	(17) 相応	(15) 相応				
(18) java	勢速	(18) 勢速	(16) 勢速				
(19) anukrama	次第	(19) 次第	(17) 次第				
(20) kāla	時	(20) 時	(18) 時				
(21) dēśa	方	(21) 方					
(22) saṃkhyā	数	(22) 数	(19) 数				
(23) samagri	和合	(23) 和合	(12) 和合				
			(24) 不和合				

の状態の区別としてあげられているものである。これら因果の原理は有情の心には関係なくはたらし、有為なるものであるからである。その中で、諸法の因果が相続して断えないはたらしきを(13)流転、これら因果の法則が乱れず、因と果の法則が整然としているはたらしきを(16)定異、因と果が相呼応しているはたらしきを(17)相応、因果相続が敏速であるはたらしきを(18)勢速、因果相続の順序よくはたらしきを(19)次第、因果相続の時間的限定を(20)時、その空間的限定を(21)方、因果相続する諸行の区別のはたらしきを(22)数、因果相続に際して、縁がはたらしきことを(23)和合というのである。尚、『瑜伽論』等其他の唯識論書では「不和合」を別に立てるが、『集論』ではあげていない。これは、「得」の反対概念である「非得」を——その一限定としての「異生性」を除いて——あげていないと同様に、「和合」の反対概念である「不和合」をあえてあげなかったためであろう。^⑦

以上の如き、『集論』における心不相応行の関係を图示すれば下の如くなる。



尚、次章に訳された如く、すべての心不相応行すべてが、「である」という設定 (praṭijapti) がある」と記述されている。praṭijapti とは、実体として有るのではなく、約束事として仮にそういうものとして知らしめ表示すること、すなわち、仮有なるものとしてあることを言う。

しかし、説一切有部では、心不相応行は、行という生滅変化をまねがれぬ有為なる非心理的過程という非物質的存在の一分野をなすカテゴリーとして実有なる法とされた。これに対して、経部は、これらの諸法が、色法などにあるような現量・比量・聖教量がないとして、仮有であるとしたのは周知の如くである。

瑜伽唯識学派では、この経部の思想をさらに発展させ、あらゆる諸法を仮有として位置づける。従って、心不相応行が仮有であるのは勿論である。『雜集論述記』では次のように説く。

不相応者、不相似義、不下与三色心等一體義相似上故。

（述記）三六九b

また、『瑜伽論』五十三では、次のように説く。

何因縁故名三心不相応。此是假想、於三諸事中一為起三言説。（大正30・五九三b）

ここにおいて、不相応とは、色や心と相似していないと

いう意味のほか、さらに、仮に觀念化されたものであり、あらゆるものについて言説を起すためのものであるから、これは心に不相応なものであるという意味づけがなされる。そのようなところに、「以上のような心不相応〔行〕は諸行すなわち諸法の状態として設定されたものであるから、すべて仮有なのである」と規定されるのである。

この様な立場から、諸行の因果の分位の種々態が心不相応行としてあげられるようになる。仮有なものであっても、因果相統として有情に認識される限り、それは行であり、有為である。その背後には、諸行を因果相統たらしめるところの阿頼耶識の思想がある。何故なら、『集論』では、この直後に、種子・阿頼耶識の定義がなされるからである。次章において、『集論』における心不相応行の解釈を訳註として紹介することにした。

註

- ① 拙著『アビダルマ思想』（法蔵館・昭57・二三二～二三三頁参照。尚、その後、西村実則氏は、北伝アビダルマにおける五位の成立過程について詳細に論究されている（西村実則「蘊処界の改変と五位の成立」三康文化研究所年報18・一二五～一二四頁）。

- ② 西村実則氏は前掲論文において、二十二根説は元来有為法

とは別系統であり、命根以外の心不相応行法や無為法という考え方をとり入れる手がかりはまったくなく、この考え方を否定しているが、後述するように、増上という性格をもつ根の考え方が、三科と有為・無為の説に影響と与え、五位説成立のきっかけとなったであろうことは否めないであろう。(前掲西村論文・一四〇—一四二頁参照)。

③ 此意総示_下二十二根、於諸聚中作用増上_上。諸法相望、各々別有_上増上用_上故、応並名根。此極増上、別説義成。(大正29・三七七b)

④ ここにおける命行・寿行の問題については、最近では、村上真完博士の詳細な研究がある(村上真完「諸行考(1)」仏教研究16・七一—七六頁)。

⑤ 水野弘元「心不相応の概念の発生」印仏研4—12・126—127頁参照。

⑥ 本表の作成に当って、水野弘元「心不相応法について」駒沢大学研究紀要14・31—59頁を参照した。

⑦ 《述記》列三十三不相応名、等言等取不相和合性。瑜伽・顯揚等皆説三十四、意顯_レ同_レ彼故説_二等言_一。然不_二別列_二不相和合_一者、論師顯_二彼体_一即非得既不_二對_レ得別立_二非得_一故、不_二對_二和合_一別説_二不和合_一。

しかし、〈AS_a〉及び〈AS_b〉には「等」に相当する語なし。

⑧ 前掲拙著・二三八—二三九頁参照。

⑨ 次章翻訳注⑧参照。

二 『集論』における心不相応行法の定義

(訳註)

心不相応行法^① (citta-viprayuktāḥ saṃskārāḥ) とは、_レう_レう_レもの_レか。得 (prāpti) と無想定 (asaṃjñisamāpatī) と

滅尽定 (nirodhasamāpatī) と無想果 (asaṃjñika) と命根 (jīvitendriya) と衆同分 (nikāyasabhāgātā) と生 (jāti) と

老 (jarā) と住 (sthiti) と無常 (anityatā) と名身 (nāmakāya) と句身 (padakāya) と文身 (vyañjanakāya) と異生性 (pit-

hagjanatva) と流轉 (pravṛtti) と定異 (pratiniyama) と相

応 (yoga) と勢速 (java) と次第 (anukrama) と時 (kāla) と方 (dēśa) と数 (saṃkhyā) と和合 (sāmagri) と_二時_一 (kāla) と

(一) 得とは、_二どう_一う_レもの_レか。善・不善なる諸法が増減することについて得 (prāpti)、「すなわち」獲 (pratī-

bha)、成就 (samanvāgama) と_二う_レ設定 (prajñapti) 施設・仮立_一がある。

(二) 無想定とは_二どう_一う_レもの_レか。遍淨天 (Sūbhakṛtsna) の欲を離れ、その上「地」の欲を未だ離れていない意に、

出離 (nīśarana) という想い (saṃjñā) に伴った作意による流動的 (asthāvāra) 心・心所法が減することについて、

無想定という設定がある。

(三) 減尽定とはどういうものか。無所有処 (akincan-yāyatana) の欲を離れ、有頂 (bhavāgāra) を超えた者に、寂靜に安住している (śānta-vihāra) という想いに伴った作意による流動的な心・心所法とある種の一定した「心・心所法」^⑭とが滅することについて、減尽定という設定がある。

(四) 無想果とはどういうものか。想の無い有情 (asam-jñi-sattva) のいる天に生じた者に、流動的な心・心所法が滅することについて、無想果という設定がある。

(五) 命根とはどういうものか。前業 (pūva-karma) によって引かれ、存続の時間の限定のある衆同分について寿命 (āyū) ^⑮という設定がある。

(六) 衆同分とはどういうものか。それぞれの有情の部類 (nikāya) ^⑯の中でそれぞれの有情の個体 (atmabhava) が相似していることについて、衆同分という設定がある。

(七) 生とはどういうものか。衆同分において、諸行が (saṃsārāṇām) 「もと」無くて「今」起ることにについて、(bhāve) 生という設定がある。

(八) 老とはどういうものか。衆同分において、諸行の連続 (prabandha) が変異したこと (anyathatva) について、老という設定がある。

(九) 住とはどういうものか。衆同分において、諸行の

連続が壊滅しないこと (avipranāśa) について住という設定がある。

(一〇) 無常とはどういうものか。衆同分において、諸行の連続が破壊すること (vināśa) ^⑰について、無常という設定がある。

(一一) 名身とはどういうものか。諸法の自性 (svabhāva) の称呼 (adhivacana 増言) ^⑱について名身という設定がある。

(一二) 句身とはどういうものか。諸法の区別「をするため」の称呼について句身という設定がある。

(一三) 文身とはどういうものか。その二つ (名身・句身) の所依となる音節について文身という設定がある。

その二つを表現せしめんがためである。それはまた、文字 (varṇa 頤) ^⑲とも「いふ」意味を顯示せんが (saṃvarṇanātā) ^{サンゾンアルナター}ためである。また、音節 (akṣara 名字) ^{アクシャラ}とも「いう」。言い換えのできる語 (pariyāya 異名) ^{パラヤヤ}として流用できない (akṣaranātā 無異転) ^⑳ためである。

(一四) 異生性とはどういうものか。聖法を未だ獲得しないこと (apratīhanā) ^㉑について異生性という設定がある。

(一五) 流転とはどういうものか。因果の継起 (prabandha) ^㉒が断えないことについて流転という設定がある。

(一六) 定異とはどういうものか。因果が様々であるこ

と(nānātva)^①について定異という設定がある。

(一七) 相応とはどういうものか。因果が類似していること(ānupya)^①について相応という設定がある。

(一八) 勢速とはどういうものか。因果が速く転起すること(āsu-pravitt)について勢速という設定がある。

(一九) 次第とはどういうものか。因果が一つづつ(ekaika)^②転起することについて次第という設定がある。

(二〇) 時とはどういうものか。因果が連続して転起することについて時という設定がある。

(二一) 方とはどういうものか。東・南・西・北・下・上・〔四維〕^③あらゆる十方においてまさに因果のあることについて方という設定がある。^③

(二二) 数とはどういうものか。諸行の個々別々の(pratyekaśas)區別(bheda)^④について数という設定がある。

(二三) 和合とはどういうものか。因果と縁(pratyaya)とが会うこと(samavadhāna)について和合という設定がある。^⑤

資料

翻訳底本〈AS₆〉pp. 18²⁰-19¹¹.

参照〈AS_P〉pp. 10¹⁵-11²⁴, 〈AS₂〉60a⁵-61a⁸, 〈AS_{an}〉66b²³-66a².

註釈〈ASBh〉pp. 9⁷-11⁸, 〈ASBh〉9b⁷-11b⁴, 〈ASV_{en}〉

700b²⁵-701a²².

〈述記〉369a-371d.

これ以外の資料出典は註中に明記。

註

① 〈ASBh〉心不相応行法には、依処(adhiṣṭhāna)という点から、自性(svabhāva 自体)という点から、そして施設(praṭipatti 仮立)という点から説明があるとされる。^{*①}また、無想定と滅尽定とは地(bhūmi 心理的段階)という点からと、出離(nibhāraṇa)と安住(vihāra)との〔二〕想を前提とする〔西〕作意(manasikāra)という点からも解説される。無想果は、「これら五つから」作意を除いたこれら〔四〕のみであり、それ以外のものは、依処等の三つのみである。^{*②}

*① 〈ASV_{en}〉では、「如是心不相応行、応以五門建立差別。謂、依処故、自体故、仮立故、作意故、地故」となっており、五門を説くのみ。

〈述記〉依処故者、顯^レ得等法必有^二心・心所・色^レ現・種^一、而為^二所依。依^レ実立故。自体故者、体通^二三品。仮立故者、明^二体非^一実。作意故者、顯^レ由^二隣近・加行・引生^一。地故者、顯^二所依地。唯依^二一地得^二地名^一故。

*② ※——※は〈ASBh〉に欠く。ただし、〈ASBh〉の無想果の説明に「この部分が重複され、その部分に相当するチンマー訳はあ^レ (ASBh₁・10⁷-8)。」

② 〈AS_{ca}〉無想異熟。

③ 〈AS_{ca}〉「和合等」と等の字がある。

④ 〈ASBh〉その中で、善・不善の諸法とは、「得の」依拠の説明である。

〈AS_{ca}, ASV_{ca}, AS_i〉の「無記 (un du ma bstan pa)」の語あり。

〈AK, p. 64¹⁵〉善・不善・無記〔法〕には、それぞれ順次に善・不善・無記なる得がある。

⑤ 〈ASBh〉増減することとは、自性の説明である。例えば、「善法が」増であるとき、最上の (abhinātra) 信等を成就すると言われ、減であるとき、下類の (mirdu) 〔信等を成就すると言われる〕。

* 〈述記〉理実三性皆有増減、但言信等、举難得故、略示法故。

⑥ 〈AK〉得には二種あって、未得のものや既失のものの獲 (lābha-pratilambha) の既得のものの成就 (samanvāgama) である (p. 62¹⁶)。

〈ASBh〉得〔すなわち〕獲、成就という設定があることは、施設の説明である。このようにして、他の場合もそれぞれに応じて理解してよ。

〈顯揚論18〉問、諸心不相応行皆是假有。云何応知。答、由三二種過失二故。一因過失、二体過失。因過失者、若言生是生因、能生生故説名為生。是即無別果生可得。此生為誰、能生因故説之為生。若言生是生体、是即從他生故、

不應説為能生。如是余心不相応行如理應知。(大正・31・五七〇a)

⑦ 〈ASBh〉遍淨天の欲を離れとは、第三禪の離欲者についてである。

⑧ 〈ASBh〉その上の欲を未だ離れていない者には、第四禪の欲を未だ離れていない者についてである。

〈述記〉上欲謂貪欲諸煩惱中勝故、遍説全離第三靜慮貪欲、未離上貪欲。諸外道等能起此定亦顯此定第四禪繫。

⑨ 〈ASBh〉出離という妄想に伴ったとは、解脱という妄想に伴ったことである。

〈AK〉何のためにこの〔定〕に入るのか。離脱 (nibṛti) を求めんがためである。これらを出離であると考え、これによって解脱を求めんがために入定するのである。(p. 69¹⁷)

⑩ 〈ASBh〉流動的とは、転識 (pravṛti-vijñāna) のことである。

* 〈成唯識〉諸転識有間有転、如声風等、無恒持用。大正31・一六c)

⑪ 〈ASBh〉減することについては、流動的心・心所のはたらきが減した者は、しばらくの間、心は入定 (samāpatti) を逐げ、所依となる身のある特殊な状態 (avasthā-viśeṣa) が減せられるから、このことによって〔減〕とされるのである。

〈述記〉不恒行心等減言、正顯三定体。由前方便第四定心厭逆心等二故、所引不恒行諸心所隨其勢力一暫時間減。由此減故、所依之身与三前有二分位差別、由謂無想寂靜

微妙に於て無想中一持て心而住。如是は漸次離諸所縁、心便寂滅、滅即是定、令三身位異名に入彼定。

- ⑫ 〈ASBh〉滅尽定において「上〔地〕の欲を未だ離れていない者に」と言わなければ、有頂の欲を離れた阿羅漢にもその〔定〕が起るからである。

〈AK〉かの〔定〕は第四靜慮地に属するが、この〔定〕は、『有頂より生じたものである。』(p. 705-8)

- ⑬ 〈AK〉に同一句あり(p. 705)、『〈AKV〉では、それについて、詳しく語義解釈あり(p. 160²⁸⁻³²)。この中で、「安住(vihāra)とは遊戯住(kridā-vihāra)の如き安住(vihāra)であらう」(p. 160²⁷)と云われぬ。

- ⑭ 上の部分、『〈AS〉に於て。〈AS₂〉 brian pa de dag las kyan kha cig hgeg pa la、〈ASV_{an}〉及恒行一分心心所。また、上の文は、『〈ASBh〉に於て用ゐらるる (tad ekat-yanān ca sūhāraṇam iti)。

〈ASBh〉ある種の一定した「心・心所法」のとは、染汚意(kliṣṭa-manas)の用ゐられぬ。

上の文は〈ASBh〉に於て、註①の*②と同文あり。尚、この文は〈ASV_{an}〉には無いが、〈ASBh〉には該当訳あり。

- ⑮ 〈AK〉想の無い有情らが住むところはどこか。それは広果天である。その中の地点にある想の無い有情らがいる(p. 68¹⁷⁻¹⁹)。

- ⑯ 〈AK〉これはまたたいたすために、異熟(vipāka)である。何の異熟かと云うと、無想定〔異熟〕である(p. 68¹⁵⁻¹⁷)。

〈ASBh〉註①*②の無想果に相当する部分あり。〈ASV_{an}〉にはなし。

- ⑰ 〈ASBh〉衆同分とは、一度の生を受けた「五」蘊の相続(skandha-santāna)である。存続の時間の限定のあるとは、時間という点からいえば、これなる「命根」が、この衆同分の上に、百年あるいは千年存続するはずであるという業所生のある特殊な功能(samādhya)である。

- ⑱ 〈AK〉「寿が」存在しないというわけではないが、別個の実体ではない。どうしてか。三界に属する業によって、衆同分にはある時間存続する引力(āvedha)がある。すなわち、これだけの時間存続するはずであるというように、業によって作られた衆同分の引力がある。その限り、その「衆同分」は存続するのであり、その「引力」が寿であると言われる。(p. 74³⁻⁵)

- ⑲ 〈ASBh〉それぞれの有情の部類の中とは、天・人等の有情の種類(jāti)の中で、ということである。

*〈ASV_{an}〉「差別」の語を加える。

〈述記〉如是如是有情者、顯三衆義。非一故。於三種々類、者顯三義。分者分三類故。

- ⑳ 〈ASBh〉それぞれの有情の個体が相似していることは、同じ種類に属しているということである。

〈述記〉自体相似者顯三同義。即多分類相似名衆同分。

- ㉑ 〈ASBh〉外部の色にも生のある状態(jatimattva)があるのに、衆同分だけが表現されたのは、有情の相続(santāna)

において「有為の四」相の設定が示唆されているためである。何故なら、外的な色は生起や破壊が明示されるが、内的な「諸行」は生や老等が明示される。

* (1) <ASV_{al}>「有為」の語あり。

* (2) <ASV_{al}>「内諸所有為相」 <ASBh> *nan gi hdu byed nams ni*。

②③ <AK> それ故に「*【おと】*無くして「*【今】*起るといふことを知らしめんがために、ただ設定のみによってこの「*【法】*が生である」とされたのである (pp. 79²⁴-80²⁵)。

②③ <ASBh> 連続が破壊するところとは、死 (marana) のことである。これら生等は、刹那ごとにあるのではない。^{* (1)} としてか。「諸行の」連続の位態 (avastha) としてあるからである。^{* (2)}

* (1) <ASV_{al}> 捨₂寿時。

* (2) <ASV_{al}> 此中依相統位₂建立生等。不依刹那。

<AK> また『發智論』の中で説かれた。「一つの心における生起とは何か。曰く、生である。滅 (vyaya) とは何か。死である。住異 (sthityanyathatva) とは何か。老である」とその中の「一つの心とは」衆同分の心であるとするのが正しい。しかも、刹那ごとに有為の諸相があるとしても、別個の実体 (dravya) であると分別しなければ正しい。どうしてか。刹那ごとに「先に」無くして「今」あるのが生起であり、ありおわって「今」ないのが滅であり、それぞれ刹那から後刹那へ連続する (anubandha) のが住であり、それが相似していないのが住異である (p. 77¹⁷⁻²¹)。

②④ <ASBh> 自性の称呼とは、眼、耳、天、人云々というようなものである。

<述記> 増言者即名是言。言即音声、詮₂弁法₂故。法体無名故謂為₂増。

<AK> 名₂は概念化 (saṃjñā-karaṇa) である。例えば色・声などの如く (p. 80²³)。

②⑤ <ASBh> 区別「するため」の称呼とは、「一切の諸行は無常である」「一切の有情は死ぬであろう」云々というようなことである。

<AK> 句とは陳述 (ākhyā) である。意味を完全に表わしうるだけのものである。例えば「諸行は実に無常である」という如きである (p. 80²⁴)。

②⑥ <ASBh> かの二つの所依となるとは、「諸法の」自性と区別の称呼の所依となる音節 a, i, u であるというようなものである。いわば、自性「としての名身」と区別「としての句身」と、その二つ「の所依となる」言語表現 (vyavahāra) 「としての文身」と、この二つだけですべてのものである。「すなわち」そのすべてのものである、これら「三」によって表現される (anuvyavahāryate) のである。これによって、これら、名・句・文身が設定された。

<AK> 文とは音節である。例えば a, u などの如きである。

②⑦ <ASBh> 言₂は換えのできる語として流用できないためであるとは、眼 (cakṣus) は眼と云ふ言₂方 (paryāya) 以外に、*【め】* 案内者 (netra) ・ 田 (akṣi) ・ 指導 (nayaṇa) ・ 照明

(locana) 等の他の言い方としてはたらくのである。それら

(案内者等) によってもそれ(眼)の理解(samjñāna)があるから。^{*}このようにして、セとイの音節はアとイの言い方を除いて他の言い方によっては認知せしめることはできない。これによって、言い換えのできる語として流用できないから音節である。さらにまた、流用(ksarāna)とは、運用(samana)のことである。

* 〈述記〉彼同類此想者、想者名也。説因爲名。由彼照了等同類此眼名二故。

〈ASV_{en}〉無異転者、謂不流变。^{*}

* 〈述記〉不流变者、流謂転義、变謂異義。謂字但守先住、更不流転・変異・改移。

- ②⑧ 〈AK〉「異生性とはどういうものか、聖法を獲得しないこととである」というのが論書の本文である。獲得しないこととは非得(apāpti)のことである。しかも異生性は無漏とはなれない。いかなる聖法を獲得しないのか。すべての「聖法」をである。区別して説いていないからである。しかし、獲得を離れているところのものが「獲得しないこと」である (p. 660-12)。

- ②⑨ 〈ASBh〉継起が断えないことを流転であると規定するのは(yavasthāna)、「利那あるは断絶(yavacchinnā)にはその慣用語(upacāra)はなからである。

〈述記〉流転者唯依相続。可非利那。不解間断者、彼義隱故、略不説之、非非流転。此中相続言顯非一利

那、不斷言顯非間断。

- ③⑩ 〈ASBh〉因と果が様々であることは、好ましい果には善行(sucarita)「どう因」が、好ましくない「果」には悪行(duścārita)「どう因」がある云々という如くである。諸果に対して、各々それぞれの因をまつことである。

- ③⑪ 〈ASBh〉因と果が類似していること(sārupya)とは、たとえ異類のもの(anyatva)にも、ある果がある「因」と相應する(yujyate)。それは丁度、富財(bhoga-sampad)が布施と相應するやうなものである。^{*②}

* ① 〈AS〉ānuruṇṇya (rjes su mthun pa) 〈ASBh〉mthun pa.

* ② 〈ASV_{en}〉由如布施感富財等。

- ③⑫ 〈AS_o〉ekatva 〈AS_p〉ekatva など、〈ASBh〉ekaika, 〈AS〉re re nas, 〈AS_{en}〉「一一」リリの如く、ekaika と読む。

〈ASBh〉「一一つ転起することは、同時刻でない転起のことである。

- ③⑬ 〈ASBh〉因果が連続して転起することがあるとき、そこに因果が己に生じ、己に滅したことが過去時であると設定され、未だ生じないことが未来時、己に生じ未だ滅しないことが現在時であると「設定される」。

③⑭ 〈AS_o〉〈AS_p〉〈AS_u〉「四維」など。〈AS_{en}〉により補う。

- ③⑮ 〈ASBh〉因果があらゆる方向に遍満していること(dig-vyapti)にこうつ方とこう仮説(upacāra)がある。また、こ

こにおける因果は色に限られたものである。無色〔の諸法〕は、あらゆる方向に遍満する能力はないからである。

- ⑤ 〈ASBh〉 個々別々の区別について数とは、「諸行が」差異なく一つの性質をもっているときには、二とか三という数などは不可能であるから。

- ⑥ 〈ASBh〉 因果と縁とが会うことは、あたかも、識と称する因果にいつて「縁にいつて」根が損れず、対境 (viśaya) が現前して、それ (識) を生ずる作意がそのあたりにあるものである。同様に、他にいつても適用しつつある。

* (1) 〈ASBh〉 *hbras buhi rkyen* 〈ASV_{en}〉 且如識法因果相續、必仮衆縁、和合。

* (2) 〈ASBh〉 *tad-jāna- dzog- pa* 〈ASBh〉 *de skyed pa* *h* *ti* 〈ASV_{en}〉 「能生此識」に「よる」*tad-jānaka* へ解たる。

- ⑦ 〈ASBh〉 以上の二つをこれらに不相応〔行〕は諸行すなわち諸法の状態 (avasthā 分位) として設定されたものであるから、すべて仮有 (prajñapti-sat) なのである。その中で、善・不善等の増益・損減の状態として「得となく」一種がある。心・心所のはたらく (pravṛtti) の状態として「無想定・滅尽定・無想果となく」三種がある。存続 (sthiti) の状態として「命根となく」一種がある。相似 (sāśṛya) の状態として「衆同分となく」一種がある。あらゆる方 (lakṣaṇa 相) の状態として「生・老・住・無常となく」四種がある。言語表現 (vyavahāra) の状態として「名・句・文となく」三種がある。〔聖法の〕不得の状態として「異生性の」一種があ

る。因果の状態として残った「流転から和合まで」がある。さらに、こにおける因果は、あらゆる有為なるものである。それとは他のものを生ずるから因であり、他よりそれを生ずるから果である。

略号

AK. ... Pradhan, P. ed. *Abhidharmakoshaḥāṣya* of Vasubandhu, TSWs, VIII. Patna : K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

AS. ... *Abhidharmasamuccaya*

AS_{gr}. ... V. V. Gokhale, "Fragment from the *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga", *Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society*, N. S. vol. XXIII (1947).

AS_{en}. ... 大乘阿毘達磨集論 (大正)

AS_p. ... Pradhan, P. ed. *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga, *Santinitketan : Visva-Bharati*, 1950.

AS_g. ... Chos mion pa kun las btus pa, *Tibetan Tripitaka, Peking Edition* No. 5550 (Vol. 112).

ASBh. ... Tatia, N. ed. *Abhidharmasamuccayaḥāṣyam*, TSWs, XVII, Patna K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.

ASBh_g. ... "Chos mions pa kun las btus paḥ bśad pa."

Peking Edition No. 5554 (Vol. 113).

ASV_{en}. ... 大乘阿毘達磨雜集論 (大正)

K Bh. 瑜伽師地論 (大正³⁰)

それ以外の略号は前掲拙著「原典資料略符号」を参照のこと。

(本稿は昭和六十三年度文部省科学研究費「一般研究C」による研究成果の一部である。)

(本学専任講師 仏教学)